

時日流転

小倉清先生
八十年忌

小倉清先生傘寿記念文集編集委員会 編

う自分の生きている意味がなくなったと考え、多分死を選んだんだと私は直観した。支えきれなかった虚しさでCさんにとっての生きることの難しさを感じざるを得なかった。

小倉先生の手のひらの上で、3つの事例を通して多くのことを私は学んだ。それ以外にも、実は私は多くのことで小倉先生に支えて頂いた。わかば会についても、家族が病気で退会し、昨年復帰したのも小倉先生が声をかけて下さったからである。振り返ってみれば、小倉ワールドの隅に自分の居場所を勝手に見つけて、居座ってきたが、何の返礼もしていない気がする。研修生時代の私には、とても小倉先生の投げかける「謎」に直接対話できる能力も、経験もなかった。当時から25年経った現在、小倉先生ワールドの隅に居続けながらも、私なりに臨床経験を積んできたつもりである。その経験から今後は、もう少し小倉ワールドの隅から、中心へとコミットし、何らかの形で貢献できればと考えている。最後に、小倉先生という師を持てたことを本当に幸せに思う。長い間有難うございました。これからもどうぞよろしくお願い致します。

小倉臨床の秘密にせまる

小林 隆児

(西南学院大学人間科学部)

私がこの文集に原稿を載せていただく機会を与えられた理由は

つい最近の出来事によっていると思っている。2年前に私はある事情から小倉先生のクリニックで週1日臨床の場を持つ機会を与えていただいたからである。還暦を過ぎたばかりの私にとってこれほどの幸運はなかったと思う。実は小倉先生との出会いは古い。昭和63年秋、福岡で私の恩師の村田豊久先生会長のもと児童精神医学会が開催された折、学会で初めて事例検討のセッションを持つことになり、私は自分から買って出て事例発表を行った。その時のコメンテーターが小倉清先生であった。精神療法とは何かよく分からないまま、がむしゃらに夢中で発表したのを今でも鮮明に記憶している。聴衆にとっては大変スリリングで面白かったと今でも話題になることがあるが、当時の小倉先生は油の乗り切った時期で、鋭い指摘が次々と乱射銃のように飛び出し、私の頭の中は真っ白となり、ほとんどまともな答えもできないままに終わった。それからすでに25年近くが経過し、私も多少なりとも精神療法についてなんらかの発言もするようになったが、当時の私には小倉先生の臨床の秘密がどこにあるかなどまったく考えることもできず、ただただ圧倒されるばかりだった。

そのような貴重な経験をした私が小倉先生の臨床の場で一緒に仕事ができるなど、想像だにしかっただけに、この幸運をぜいとも大切にしたいと思った。そこで私が思いついたことはいくつかあったが、そのひとつが私の恩師村田豊久先生との対談企画であった。この企画は両先生の賛同を得て、無事遂行できて、昨年遠見書房から上梓することができた（「子どものこころを見つめて一臨床の神髄を語る」）。その際、私は小倉先生の臨床の秘密に迫ろうと、そんな内容の質問もぶつけた。それはある程度成功

したのではないかと思っはいるが、もうひとつ密かに希望していたことは、ぜひとも小倉先生の面接の陪席をしたいということであった。しかし、関東中央病院でならばいざしらず、クリニックという場ではそのようなことは難しく、小倉先生も普段からそれは無理なような発言をされていた。そこで私が思い立ったのは、先生が時々外の機関で面接をされていることを知り、それに同行して陪席させてもらうということであった。その機会が早速訪れた。それは都内にある女性のための更生施設での面接であった。そこには複雑な家庭事情を抱えてこれまで大変な人生を送ってきた人ばかりが入っているということであった。小倉先生は快く承諾してくださり、一緒に出かけて行くことになった。当日は女性3名の面接が予定されていて、私はずっとそばで陪席することができた。私はどこに小倉先生の臨床の秘密が隠されているか、必死になって宝探しでもするような気持ちで聞き耳を立てながら聴いていた。そして、これだと思ったことをいくつか発見した。

第一は、これほど自然体で面接することは難しいのではないかと思われるほどに普段着のままにざっくばらんに話されていたことである。それが相手の気持ちを和ませ、いつの間にか気持ちを語らせることに繋がっているだろうということであった。第二に、相手の身体の動きや変化を实によく観察されていて、そのことをさり気なく面接の中で取り上げて、それがいかにその人の人生と繋がっているかをさらりと話されていることであった。第三に、このことがもっともすごいなと思ったことなのだが、二番目に面接された女性だったと思うが、その人は子ども時代に親から虐待されたという背景をもち、以後青年期から今日まで凄まじい

人生を送ってきた人であった。その人はこれまで受診した医療機関で、発達障害とか境界性人格障害だといわれた、しかし、治療らしいことは何一つしてもらえなかったことを恨めしく語っていた。そこで診断の話になった時、小倉先生は次のように少しユーモアも交えながら、「あなたの病気の診断は、境界性人格障害などではなく、境界性人生だ」と発言された。相手の女性はそれを聞いてしばらく無言でいたが、どこか納得したように見えた。ここに小倉臨床の秘密のひとつが示されていると私は確信した。患者一人ひとり固有の人格を持ちながら、人生を送っている。そのような人たちの病にふさわしい臨床診断はどうあるべきか、その人が一番納得のいく診断とはなにか、ということ考えた時、このような視点が患者自身の固有の苦しみをいかに和らげるか、ということ私はそこで確かなものとして学んだように思う。

さらには、陪席のみならず、私にとって財産となっているのは、クリニックのスタッフ控え室で隣同士に座って日常行っている雑談である。常に本音で率直に話される小倉先生になんでも気楽に尋ねることができる。こんな貴重な機会が持てるなど、信じられないほどの幸運である。これまでも多くのことを学んだが、その中で一番印象に残っていることのひとつで、これまた小倉先生の臨床の秘密に迫るものだと思っていることがある。昨年のことだったと記憶している。ある日青年期の自己破壊傾向の強い女性を受診してきた。両親同伴であったが、小倉先生はいつものように1時間ほど患者さんと話をされていたが、そばでじっと聞いていた父親が何かにつけてさかんに「そんなことはない」と口を挟んでいたというのである。小倉先生は面接の間、ずっとそのこ

とが気になっていたので、面接の終わりに差し掛かった時に、父親に向かって「お父さんはいつも「そんなことはない」とおっしゃいますね」と指摘したという。すると間髪入れずに、父親は「そんなことはない」と反論したというのである。「ほら、やっぱりお父さんは「そんなことはない」とおっしゃいますね」と小倉先生は返されたという。父親の表情が眼に浮かびそうな話である。その時の面接はそれで終わったけれども、次の面接から父親の態度が一変したという。本人は気づいていないような何気ない言動の背後に重要な意味が隠されていることを教わったものである。小倉先生の臨床の秘密は、これらのエピソードに端的に示されているのではないかと私は思っている。小倉先生の恩師である土居健郎氏が日常語で臨床を考えることの大切さを常々主張していたことと符合する内容である。

今、私は乳幼児期の母子臨床の経験をもとに、氏が生み出した「甘え」理論の再評価を試みているが、残念ながら氏とは直接の面談もなく、議論したことがまったくない。そのことを常々残念だと思っていたが、まさか、土居氏の弟子でもあった小倉先生のクリニックで、間接的にはあっても、土居氏に出会い（なぜならスタッフの控え室の小倉先生の席の真ん前に土居健郎氏の生前の写真が掲げられていたからである）、その「甘え」理論を学ぶことが出来るとは……。なんと幸運なことかと思ってしまうのだ。こうして振り返ると、この2年間の私が経験してきたことは、私のこれからの臨床において何にも代え難い貴重な財産となっていることを改めて思うのだ。小倉先生に心よりお礼申し上げるとともに、いつまでもお元気でいてほしいと願う次第である。

おもしろ〜い小倉先生、 ほんとうにありがとうございます

齋藤久美子

(甲子園大学)

先生にはただ感謝するのみの私ですが、大体30数年前に京大にご出講下さいました折が初対面で、確かその時のお話しの思春期病棟を木刀を持って廻っていらっしゃるというのがあり、そのお姿を想像してつい笑ってしまいながら楽しい先生だと思いました。先生の前で、私は割とよく笑って来たように思います。お目にかかる機会にそう頻繁に恵まれたのではなく、実際は学会などで年に一度がせいぜいくらいの、「点」がほつほつたどれるような、連続線には至らないものでしたが、私の内心ではいつの間にか、それらが「線」状に連なって、恒常感を備えた感じのものになっていたのか、心易い気分でお話させていただいたりするようになりました。先生の何かにつけさり気ない、殊更改まることをされないお人柄から生まれる親近感と、何よりもお会いしてお話した「点」がそれぞれ部厚く濃い中味のものだったことが、この連続感を生んでいるみたいです。

そうした中で、私が感謝で一杯の、印象深い「点」を一つ上げさせていただきます。実はあまりにも個人的な心の中のできごとなので、話すのは大へんためられるのですが、この際ですから公衆の面前を思い切って忘れることにさせていただきます。